防災能力の向上に関するコンテンツ作成 ―その時に「知」で備える。

来るべき災害に知識、体制の両面で備えるとともに、今後の訓練等に活用することが出来るマニュアルや防災教材の整備を行うことを目的に、以下のコンテンツ作成などを行いました。

1 学校防災・安全マップの作成/防災冊子「吾妻小防災手帳」、「吾妻中防災手帳」、「取扱説明書」の作成

2 危機管理マニュアルの改訂

3 東日本大震災の避難所開設、運営にかかる経験に基づくケースメソッドの作成

学校防災・安全マップ

子どもの目線からの地域の災害危険性を把握し、災害時に判断する力、行動する力を醸成することを目的に、大規模災害を想定し、学区内の安全な場所や注意が必要と考えられる危険個所を調べ、防災マップとして取りまとめを行いました。また、防災マップの作成は水・食料の備蓄などの災害発生後に必要となる資機材の場所などを把握することで、災害への備えを促進することも目的としています。

なお、AZUMA 学園では、交通事故危険箇所や不審者出没情報などをまとめた安全マップを従前より作成してきています。防災マップと安全マップではその活用場面が異なりますが、双方で活用できる情報が多くあるため、PTA 関係委員会(安全委員会、地区委員会、広報委員会)と協力の上、安全マップも作成しました。

今回製作したマップの特徴などは以下の通り。

【防災マップ・安全マップ共通】

・安全マップと防災マップを両面印刷することで場面に応じて活用頂けるようにしました。
・自宅の場所を書き込んだり，ランドマーク(エキスポセンターのロケット，松見公園のタワー)を色塗りしたりすることで，子ども達の自宅と学校の位置関係などの把握を促します。
・目立つ場所に掲示し、長く活用できるように、A3 サイズ、コート紙としました。
・もしもの時に必要な連絡先などを記しました。

【防災マップ】

・災害発生時に必要な関係機関等の情報や災害用伝言ダイヤルや情報収集先を記しています。
・災害時の時の待ち合わせ場所を書き込むことで，もしもの時の行動を考えることを促します。

【安全マップ】

・従来の情報に加え，平成 25 年度に定められた吾妻小学校推奨通学路を記しています。

作成した、防災・安全マップは、2015 年 2 月 2 日につくば AZUMA 学園の全生徒・児童に配付するとともに、110 番の家の協力家庭・店舗、近隣の防災、防犯関係機関などにも配布しました。

「防災マップ探検隊」結成！

「防災マップ探検隊」は、AZUMA 防災・安全マップを作成するにあたり、AZUMA 学園学区(吾妻小学校、吾妻中学校区)内および近隣の状況を、防災などの視点でかつ子ども達の視線で把握するために結成されました。

10 月 19 日(日)、学区内の AED(自動体外式除細動器)の設置場所を把握するために、防災マップ探検隊は、学区内とそのまわりで AED の探索を行いました。

AED は、突発的に致命的な不整脈による突然の心停止(心室細動)を起こして倒れた人がいたときに心臓の状態を正常に戻す装置で、普及も進み町中でもよく見かけるようになりました。

しかしながら、地図等でその場所が示されているのは、市役所などが設置した物に限られています。

今回、設置が確認された、店舗などの AED については、「AZUMA 学園防災マップ」への掲載依頼をするとともに、もしもの時に役立つ連携を図りました。

参加した子ども達からは、「こんな場所にも AED があるね。」という驚きの声が上がる一方、「せっかく AED を置いているのに、このステッカーの位置だと判らないよね。」という意見が出ていました。

また、掲載協力を申し出て下さった事業者からも、「自分達も場所を認識していませんでした。もっと分かり易い場所に設置した方が良いですね。」という、声が聞かれました。

AZUMA学園防災マップ

発　　行：つくばAZUMA学園
防災モデル事業
推進委員会
発行年月日：平成27年 2月 1日

おかしも(ち)

お	さない	避難する時に前の人を押さない
か	けない	校舎内では急いでいても駆けない
し	ゃべらない	静かに避難、喋らない
も	どらない	気になることがあっても戻らない
(ち)	らばらない	校庭に出たら集まって散らばらない

災害時の連絡方法「171」
災害用伝言ダイヤル

伝言の録音方法	伝言の再生方法
171にダイヤル	171にダイヤル
ガイダンスが流れます	
録音の場合 1	再生の場合 2
ガイダンスが流れます	

録音する人も再生する人も
自宅の電話番号をダイヤルしてください

いざという時の連絡先

吾妻小学校	☎851-7101
吾妻中学校	☎852-7751
つくば市役所	☎883-1111
つくば中央警察署	☎851-0110
つくば駅前交番	☎856-0110
つくば市消防本部	☎851-0119
つくば市中央消防署	☎851-1691
NTT(電話の故障)	☎0120-444-113
東京電力茨城カスタマーセンター	☎0120-995-332
筑波学園ガス㈱	☎848-5151
関東鉄道㈱つくば中央営業所	☎836-1145
つくばエクスプレスつくば駅	☎855-7108

大切な人の連絡先

家族・親戚・知人

名前	
電話番号	
名前	
電話番号	
名前	
電話番号	
名前	
電話番号	

災害時の情報収集先

【ラジオ・ネットラジオ】
- ラヂオつくば　FM 84.2MHz
  ネットラジオで聞く→http://www.simulradio.jp/
- NHK FM放送　FM 83.2MHz
  ネットラジオで聞く→
  http://www3.nhk.or.jp/netradio/
- IBS茨城放送　土浦：JOYL 1458kHz
- CRT栃木放送　宇都宮：JOXF 1530kHz
  ネットラジオで聞く→http://radiko.jp/#

【メールサービス】
- つくば市災害通知メールサービス
  http://www1.city.tsukuba.ibaraki.jp/MailSys/disaster/mail
- 茨城県防災情報メール
  http://www.pref.ibaraki.jp/bousai/mail/bousai.html

【Twitter】
- つくば市公式　@tsukubais
- つくば市危機管理情報局　@tkb_kiki

天王台地区

凡　例

- 防災関係機関
- 消防本部
- 消防署・分署
- 緊急医療告示機関
- 指定避難所
- 予備避難所
- 飲料水兼用防火水槽
- AED(自動体外式除細動器)
- 「こどもを守る110番の家」(店舗)
- 学校　公園
- 自分の家
- 待ちあわせ場所

自分で書いておこう

AZUMA学園安全マップ

発　　行：つくばAZUMA学園
PTA安全委員会
発行年月日：平成27年 2月 1日

イカのおすし

イ	ない	知らない人にはついて行かない
カ	らない	知らない人の車には乗らない
の	お声で叫ぶ	「助けて！」と大きな声を出したり、防犯ブザーを鳴らす
お	ぐ逃げる	大人のいる方にすぐ逃げる
す	らせる	どんな人が何をしたか、家の人や先生に知らせる
し		

天王台地区

平塚通り　24　平塚線中央　ミニストップ　地鶏・築地料理 源　しらかし公園　天久保3　筑波大学　一の矢学生宿舎　学園東大通り　けやき通り　天王台1　ミニストップ　井上サイクル　柴崎　地鶏・築地料理 源　しらかし公園　セブンイレブン　かきの木公園　かつ大　ローソン　(有)シバサイン　天久保4丁目　天久保3　山鳩公園　筑波技術大天久保キャンパス　天久保4　国立科学博物館筑波実験植物園

黒田園芸センター　茶の木村園　桜山児童公園　筑波技術大学春日キャンパス　天久保2　ココストア　平砂学生宿舎　大学病院西　高田眼科　南原児童公園　ゆりのき通り　天久保公園　北方園　ローソンストア100　天久保2丁目南　エキスパート㈱　学園東大通り　大学前薬局　筑波大学附属病院　追越学生宿舎　セブンイレブン　大境児童公園　春日3丁目　ローソン　関東礦油　消防本部(H27年度移転予定)　中央消防署(H27年度移転予定)　筑波メディカルセンター病院　吾妻中　春日交流センター　つくば総合健診センター　研修センター入口　かつらぎ公園　春日学園　春日児童公園　つくば春日団地　学園西大通り　春日1　いきいきライフSPA春日店　中国四川料理台北大飯店　今川薬局　チロル松見売店　筑波研修センター　リコー　春日1丁目西　春日一丁目住宅　県立つくば看護専門学校　松見公園　天久保1　妻木　セブンイレブン　メガネのトーキョードー　ファミリーマート　稲葉燃料　北大通り　244　美津野商事　細田金物店　ピーターパン　筑波学院大学　友朋堂書店　キッチンミズホ　ケンロククリーニング　ベデストリアンは自転車に注意　東京ランドリー学園店　フランス菓子フレッソン　ウエルシア　桜ヶ丘歯科　408　筑波大学春日キャンパス　55　上宿児童公園　いちょうの丘公園　吾妻3　学園中央自動車学校　つくばエキスポセンター　ナイスレンタカー　セブンイレブン　パティスリー「モン・サン・ミシェル」　デニーズ　吾妻保育所　吾妻西児童館　中央公園　吾妻3丁目　吾妻東児童館　東成建設㈱　日経新聞社　吾妻2　吾妻小　吾妻2　ジャンボ公園　吾妻四丁目住宅　ななまる公園　吾妻公園　つくばエクスプレス　つくば文化会館アルス　吾妻二丁目住宅　つくば駅前交番　吾妻幼稚園　つくば駅　中央通り　24　吾妻4丁目西　吾妻1　ダイワロイネットホテルつくば　バスターミナル　つくば駅前　オークラフロンティアホテルつくば　合同庁舎　時の公園　Q't　ろくまる公園　筑波学園郵便局　つくば市市民活動センター　吾妻交流センター　NTT　吾妻一丁目住宅　ホテルグランド東雲　学園西　西武/クレオ　土浦学園線　408　237　つくば中央警察署

N

緊急連絡先

吾妻小学校	☎851-7101
吾妻中学校	☎852-7751
つくば中央警察署	☎851-0110
つくば駅前交番	☎856-0110
つくば市消防本部	☎851-0119
つくば市中央消防署	☎851-1691

凡　例

- 「こどもを守る110番の家」(店舗)
- 交通事故の危険あり
- 暗い・人通りが少ない
- 不審者情報あり
- 事件発生場所
- 小学校推奨通学路
- 学校
- 公園
- 自分の家

自分で書いておこう

防災冊子「吾妻小防災手帳」、「吾妻中防災手帳」および「取扱説明書」

「地域と学校が連携した防災教育モデル事業」で実施してきた訓練・防災キャンプ・防災セミナーなどの取り組みを通じ、「大人にも児童・生徒にも役立つもの」という観点で、防災に対する問題認識や共有すべき情報について様々な意見交換などを行い、防災冊子「吾妻小防災手帳」、「吾妻中防災手帳」として取りまとめました。

防災手帳には「まわりの人に見せること」として、引き渡しについて記載する箇所があります。ここでは、学校に提出している引き渡しカードと同じ内容を記載し、もしもの時の引き渡しがどのようになっているかを把握します。

吾妻小防災手帳の特徴（「防災手帳取扱説明書」からの抜粋）

吾妻小地区に住む子ども・保護者のために“カスタマイズ”された防災冊子！

災害に対する吾妻地区の特性や、発生後の行動の仕方のアドバイス等をつくば市の危機管理課に確認、防災の専門家（保護者の方々！）の意見も踏まえ、冊子の企画・制作を行っています。

本手帳の仕様・・・災害時に役立つ情報と防災マップ。A3 両面印刷の折り畳み式

手帳作成の目的

- 手帳を通じ、地域、学校、家庭での災害や事故から身を守ることを考えます。
- 地域の人たちが、AZUMA 学園の子ども達は防災手帳を携帯していることを知り、もしもの時にそれぞれの子どもに応じた対応を促します。

使用上の注意

- 子どもも大人も、まずは自分の身を守ることを考えましょう。
- 書き込んだ情報は、定期的に見直しましょう。
- 災害時に必要な情報は各家庭で異なります。必要な情報を書き込んだオリジナルの防災手帳・マップを作りましょう。

子ども版と大人版を両立！の構成

子どもにも大人にも見てほしい。けれど二つはつくれない…を解決したのが、この構成です。

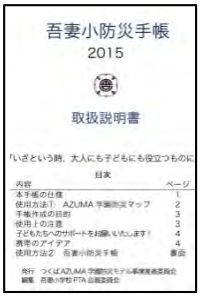
子ども版は絵を多く、鮮やかに。大人版は色の彩度をおさえシックに、しています。

・**防災手帳取扱説明書**

各家庭で防災手帳を有効に使いこなしてもらうための解説書が、「防災手帳取扱説明書」です。

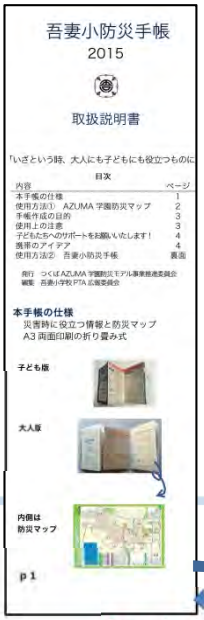
使い方の一例を示しながら、誌面の関係で載せることができなかった情報や、ちょっとした使い方のコツをまとめています。こちらも折り畳み式で、手帳に収まる形になっています。

防災手帳取扱説明書の構成



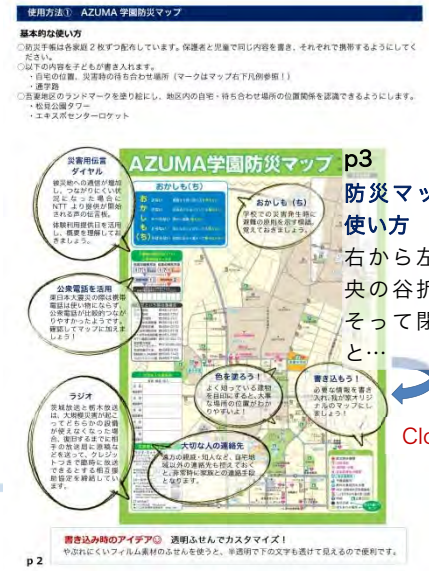
Open!

表紙
タイトルと目次
下に開くと…。



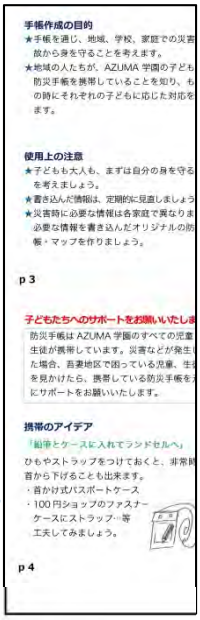
p1
手帳の仕様
右から左に開くと…

Open!



p3
防災マップの使い方
右から左に中央の谷折りにそって閉じると…

Close!



p4
手帳作成の目的
使用上の注意
子どもへのサポートをお願いいたします。
携帯のアイデア
これを裏返すと…

裏面
吾妻小防災手帳の使い方
これを再びたたむと

手帳＋取説
すっぽり収まります
一緒に持つことも。

危機管理マニュアル

AZUMA 学園では、災害発生時を対象とした危機管理マニュアルが整備されており、特に在校時間帯の災害などの発生を想定した行動規範として、「AZUMA 学園 重大緊急事態発生時の児童・生徒の引き渡しに関するガイドライン」を定めています。

今回のモデル事業を通じて、本ガイドラインのバージョンアップを図りました。

AZUMA 学園 重大緊急事態発生時の児童・生徒の引き渡しに関するガイドライン

1．対象事象

児童・生徒の在校中に、大規模地震(概ねつくば市内で震度５弱以上)、ゲリラ豪雨、竜巻などの異常気象による重大緊急事態が発生し、大人の引率なしに児童・生徒が帰宅することが困難もしくは危険な状況。

また、不審者の侵入、学校近隣で重大な事件、事故の発生した場合もこれに準ずるものとします。

2．事前準備

AZUMA 学園に通う児童・生徒は、入学・転入時に「児童・生徒引き渡しカード」を提出するものとし、毎年４月に記載内容の見直しをするものとします。

児童生徒引き渡しカード

3．引き渡しの手順

・児童・生徒を教室などから安全な場所に教職員が避難誘導します。
(グランドが使用できる限りは、グランドを一時避難場所とすることを基本とします。)
・避難後は、各クラスの担任により避難状況の確認し、「避難状況取りまとめ一覧表」を作成します。
・その後、児童・生徒を保護者に直接引き渡し、下校します。
・引き渡しにあたっては、「避難状況取りまとめ一覧表」に保護者がサインするものとします。
・保護者が引き取りに来られない場合は、「児童・生徒引き渡しカード」記載されている代理の方に引き渡すものとします。

4．兄弟姉妹が吾妻小学校および吾妻中学校の両校に在籍している場合

・保護者が両校に引き取りに行き、兄弟姉妹の上の生徒より(中学校より)引き取ることを基本とします。
・それぞれの家庭の兄弟姉妹の在学状況ついては「児童・生徒引き渡しカード」に明示するものとします。また、引き取り順の基本に依りがたい場合も「児童・生徒引き渡しカード」に明示するものとします。

5．その他

・重大緊急事態発生時には、「つくば市メールサービス(学校緊急メール)」、学校ホームページなどを活用して可能な限り情報発信するように努めますが、停電、通信インフラの途絶を想定し、「１．対象事象」に相当する事案が発生したと判断される場合は、自発的にお子さんの引き取りに来てください。
・重大緊急事態発生時のお子さんの引き取りは、徒歩でお願いします。学校の駐車スペースが限られていること、学校周辺での渋滞発生を抑制すること、を鑑み、自動車での引き取りはご遠慮ください。
・重大緊急事態発生時の対応については、ご家庭内でもご相談をお願いします。特に両校にお子さんが在籍している場合、小学生のお子さんの引き取りまでに相当の時間を要することをご家庭でお子さんにご説明ください。

東日本大震災の避難所開設、運営にかかる経験に基づくケースメソッド

震災から、４年あまりが経過し、その後も様々な災害が全国各地で発生する一方、震災の出来事の風化が懸念されています。震災の経験、記憶はそれぞれが乗り越えた困難であり、過去ではありますが、これを記録として残し、当時の行動で巧くいった事例、巧くいかなかった事例を今後の災害対応に役立てていくことが重要です。また、震災を経験していない地域、世代の皆さんに、経験、記憶を伝えることで、災害を疑似体験していただき、防災意識の向上を促すことも目的としています。

記録に残し、防災意識向上のために。東日本大震災が発生した際の震後対応～避難所開設・運営を行った吾妻小学校の事例と、避難所開設と同時に病院、消防本部の機能を担うこととなった、岩手県山田町立山田南小学校の事例を対象にした、物語風の読み物「ケースメソッド」を作成しました。

ケースメソッドを製作することの意義

平成 23 年３月 11 日に発生した東日本大震災では、沢山の学校で様々な経験をしました。

しかしながら、これらの貴重な経験は、人事異動などにより当事者が現場を離れるとともに当事者自身の記憶も曖昧なものとなり、失われつつあります。

ケースメソッドは、当時の関係者へのヒアリング調査などを通じ、取りまとめたものです。

ケースメソッドの最大の目的は、東日本大震災発生時の出来事を取りまとめた記録を読むことで、当時の担当者などの“修羅場”的な現場の状況を疑似体験していただくことにあります。近年、我が国において多様な災害(地震、集中豪雨、竜巻、火山噴火など)が頻発していることから、本資料が、学校関係者、地域住民などの地域防災関係者に様々な気づきを与えてくれることを期待しています。

さらに、「災害時のイメージトレーニングのための具体事例」として利用するなど、読者による発展的な活用も期待しています。例えば、吾妻小学校のケースでは、停電を生じることなく、校内放送を始め電気機器を通常通り使用することができましたが、“停電が生じた場合についての検討”など、発展的な“修羅場”を想定する教材として活用することが考えられます。

東日本大震災における小学校の対応：つくば市立吾妻小学校の場合

～緊急時における児童の引き渡しおよび帰宅困難者を対象とした避難所開設・運営～

この日は朝から防災を意識していた

２０１１年3月１１日、つくば市立吾妻小学校では、ＰＴＡ本部役員とその児童、教職員数名で防災ラジオドラマの収録が行われていた。

吾妻小では、前年度(平成 21 年度)より、「防災講習会」として、災害発生時に学校が避難所となることを想定した机上訓練などを実施している。当年度(平成 22 年度)も、7 月に「(独)防災科学技術研究所」(以下：防災科研)の協力のもと、防災について考える講習会を持つことができた。

この日は、「訓練成果を残すために防災ラジオドラマを録音しては」、という防災科研からの提案を受け、講習会で話題となった「緊急時の保護者への児童引き渡し」について、いくつかのケースを想定したシナリオでラジオドラマの録音を行った。収録は、予定通り午前中に終了した。

教職員と児童は学校生活に戻り、ＰＴＡ本部役員はそれぞれ帰宅したり、仕事に戻ったりした。ＰＴＡ会長の庄司は、防災科研の坪川、李とともに、彼らへの講習会のお礼を兼ねた休息の時間を過ごすため、学校から歩いて、つくば駅近くの喫茶店に向かった。

突然やってきた大きな揺れ

時計の針は、午後３時を告げようとしていた。まもなく１・２学年の下校時間である。女性教頭の櫻井は、不審者の侵入防止などのために普段は閉じられている昇降口の扉を、子どもたちの下校に備えて開放し、職員室に戻るところであった。下駄箱を通り過ぎたところで、二人の児童に会い、声をかけた。児童らは、職員室前のクラス毎のメールボックスに入った、保護者宛の配布物を取りに来ていた。校門付近には、いつものように我が子を迎えに、来校した保護者の姿も垣間見えた。卒業式を間近に控え、慌ただしくも、普段通りの一日が過ぎようとしていた。

櫻井は、床から小刻みな揺れを感じ、それは次第に大きくなっていった。

「地震！？」、次の瞬間、体が大きく揺さぶられる。

櫻井は、視線の先の用務員に「通用口を開放して！」と叫び、二人の児童を抱え廊下に伏せた。すぐ近くの大型水槽が倒れて、児童に襲いかかることを懸念した。激しい揺れが続く。伏せた背中に冷たいものを２度、３度と感じた。どれだけの時間が過ぎたか定かではない。腕の中で泣き声がする。背中に感じた冷たいものは、水槽からあふれ出た水だった。幸い水槽が倒れることはなかった。揺れが収まると、二人の児童を連れて、職員室へ向かった。脳裏には「避難！」の二文字が浮かんでいた。

後に「東日本大震災」と呼ばれる災害が、日本に深い爪痕を刻みはじめた瞬間であった。

教室と校庭

２学年担任の関口は、週末に向けて児童を送り出す「帰りの会」の最中に地震に見舞われた。「机の中に入って！！」と叫び、急いで児童に安全姿勢を取らせ、自らは頭上からものが落ちてこないかを確認した。長い揺れの中、泣き出す児童や萎縮して身動きができない児童がいたが、関口は、彼らをじっと見守った。

また、６学年担任の斎藤は、体育の授業で児童とグランドにいた。そこへ唐突に大きな振動を感じた。児童にはその場にしゃがむよう伝えながら周囲を見回すと、揺さぶられギシギシと音を立てる校庭の木々が見えた。さらに周辺の建物が揺れているのもハッキリと判った。揺れが収まると船酔いのような症状を訴える児童もいた。揺れが収まり、職員室の方へ目をやると、“校庭に留まるように”と指示をしているのが見えた。

職員室

校長の沼は、過去に経験したことのない揺れを職員室で感じた。書棚を押さえながら揺れが収まるのを待った。机からは引き出しが飛び出し、書類などが散乱した。職員室には数名の教職員が残っていた。彼らも激しい揺れで動揺を隠せない様子だった。揺れが収まると、櫻井が沼の元に駆けつけた。後方には児童の姿も見て取れた。

余震が続く中、沼にとって重要な決断が迫っていた。一刻の猶予もない決断が・・・。

一人、自宅で

激しい揺れの中、自宅のベッドでなすすべもなくじっとしている児童もいた。

吾妻小６学年の彼女は、数日前にインフルエンザを患い、学校を休んでいた。両親は共働きで不在、弟も普段通り登校していた。前日には熱も下がり、インフルエンザ特有の身体のだるさも癒え、特にすることもなく、二段ベッドの上段に身体を横たえて家族の帰りを待っていた。

突然、ベッドがきしみ、本棚が倒れこんできた。訳がわからず、布団にくるまり時が過ぎるのを待った。揺れが収まると反射的に自宅の外へと飛び出した。

つくばエクスプレス　つくば駅周辺

庄司は、坪川らとつくば駅近くの喫茶店で地震に遭遇した。音を立て、激しく揺れる窓。揺れが収まると冷静に辺りを見回した。建物の中は騒然としており、天井からはエアコンの室内機が脱落してぶら下がっていた。また、スプリンクラーが作動して水が噴き出し、床が水浸しとなった。

脳裏に浮かんだのは、先ほどまでいた吾妻小のこと。学校にいる娘は、校舎は大丈夫なのか？、建物内で多くの人々が右往左往する中、施設内の状況を横目に、先ほど通ってきた道を吾妻小へと急いだ。

一時待機

沼は、櫻井に校内放送をかけるように指示した。幸いなことに吾妻小周辺は停電せず、通常通り電気機器を使用することができた。

「皆さん大丈夫です。落ち着いてください。」と櫻井は全校の子ども達、教職員に声をかけた。

続けて、「指示があるまで、教室を出ないでください。」と伝えた。

実は、櫻井は、“教室を出ないように”とアナウンスしたことは記憶しているが、マイクに向かって発した最初の言葉は覚えていない。子どもたちを少しでも落ち着かせ安心させたい一心で、無意識のうちに口から出たものだった。

後日、関口から、「櫻井先生の“大丈夫です”の第一声を聞いて、冷静になれました。」と伝えられ、このことを知った。

下校の迎えに来ていた保護者の中には、早く児童を引き渡すよう、教室の外から窓越しに関口に迫る者もいた。そのような中、関口は放送の指示に従い、児童らを教室に留まらせつつ、屋根などからの落下物を懸念して保護者には建物から離れるように言った。

しかし、大声で児童の引き渡しを要求する保護者も・・・。

その直後、大きな余震が発生し、両者は互いに身をかがめて安全姿勢を取らざるを得なかった。

校庭への避難指示

余震が続く中、職員室では沼と櫻井、副校長の大久保の三人が話し合う。「どのタイミングで児童を校庭に避難させようか？」地震による校舎内の安全も確認できない中、一刻も早く、児童を校庭に避難させたい。しかし、いつまた大きな余震が発生するかも解らない。櫻井が保護した二名の児童は、職員室にいた事務職員の誘導でそれぞれ教室に帰し、クラス担任に対応を任せた。迎えに来ていた保護者達は、我が子を引き取らんと職員室へと駆け込む。櫻井は彼らを落ち着かせ、児童の校庭避難を待つよう

に伝えた。
そんな中、庄司と坪川が職員室へ駆け付けた。誰もが判断を迷う中、大きな余震が収まり、庄司も坪川も今がその時と沼に進言し、沼は覚悟を決めた。「今から児童を校庭に避難させます」。

全児童の校庭避難を決めた沼は、再び櫻井に校内放送を指示した。ポイントは二つ、一つは「モノを持たない」、もう一つは「防寒着を着用する」だった。沼は、緊急かつ困難な対応が求められる状況下にもかかわらず、気候にも配慮した冷静な判断をした。
櫻井も努めて落ち着いてアナウンスをした。ほどなく児童らは、火災などを想定した普段の避難訓練と同じように、クラス担任の誘導により校庭に集合した。
しかし、関口は防寒具着用の指示を受け取れていなかった。また、体育の授業中で校庭にいた斉藤も、子どもたちを体操着のままグランドで待機させることになった。このため、一部の児童は冬の校庭で寒さをこらえての一時避難と引き渡しを余儀なくされた。

児童引き渡し

沼は、動揺した表情で校庭避難する児童を落ち着かせながら、保護者への引き渡しの準備を急いだ。これも毎年行っている、引き渡し訓練と同じように。
高学年児童の保護者も来校し、児童の引き渡しが始まった。これまでの訓練の経験が生き、大きなトラブルも無く、引き渡しは順調に進み、午後５時を回った頃には殆どの児童が下校した。
この報告を受け、沼は、ルール通り「引き渡しカード」に記載された保護者もしくは代理引き取り者にすべての児童が引き渡されたと認識した。

児童引き渡しの様子
（後日行われた訓練）

しかし、斉藤のクラスでは、クラスメイトの保護者ではあるが、「引き渡しカード」に記載されていない者に児童を引き渡したケースがあった。その児童の保護者は、地震発生時に学校から離れたところにいたため、引き取りに来られなかった。また、代理引き取り者の状況も解らず、斉藤はやむを得ずとった対応であった。ただし、そのような場合でも、児童と引き渡し者のそれぞれに確認をした上で、確実な合意により引き渡すとともに、どの児童を、誰に、何時に、引き渡したかを、名簿にすべて記録した。
空が薄暗くなってきた頃、小雨が降り始めた。このため、残った児童を昇降口に近い低学年校舎に移動させた。彼らは、突然の騒ぎに状況を飲み込めず、妙にうきうきした気分で教室前の広場で走り回っていたことが、沼の印象に残っている。
その後、児童が数名になったところで、保健室に移動させ、午後８時頃にはすべての児童の引き渡しを完了した。

隣の家に

一人、自宅で地震に遭遇した６学年の児童は、揺れが収まると一旦家の中に戻り、母親の仕事先に電話したが、つながらない。何度もかけ直していると、再び大きな揺れに襲われ、慌てて家の外に出た。コードレス電話の子機を手にしたまま。
すると、毎朝一緒に登校している隣の友達のお母さんが、家に招き入れてくれた。ほどなく、電話の子機が鳴り、母親と連絡を取ることができた。すぐに戻るとのことだった。
「コードレス電話って隣の家でもつながるんだ・・・」と妙なことに感心しつつ、母親を待った。
30 分ほどで、母親が帰ってきた。停電により信号が消えており、普段のように車を走らせることができなかったそうだ。
母親と自宅に戻ると、娘は興奮気味に地震発生時のことを話した。母親は、息子を迎えに行かなけれ

ばと思いつつ、「気持ちが落ち着くまでは」と娘を気遣い、話を聞いた。

　すると、お隣のお母さんが自身の子どもとともに息子を連れて帰ってきてくれた。お隣は引き渡しカードの代理引き取り者とはしていなかったが、緊急時なので仕方がない、と母親は思った。

校舎内点検

　校庭で引き渡しが始まった頃、児童の校庭避難を見届けた櫻井は、これも普段の避難訓練どおりに校舎内の点検を始めた。建物被害なども懸念されたため、用務員が同行し、二人で校舎内を廻った。校舎には大きな被害はなさそうだ。しかし、体育館は屋根がずれており、被災していた。

　その時、櫻井は思った。「体育館には入れない」。

　櫻井は、児童の校庭避難の次のステップを考えていた。それは

　　「避難所の開設」

　ただし、それはあくまでも児童の保護を目的としたものであり、見知らぬ帰宅困難者などを対象にこれから３日間続く避難所運営を、櫻井は想像すらしていなかった。

　なお、体育館の被災により、卒業式は吾妻中学校体育館を借用して実施することとなったが、当初予定通り３月 18 日(金)に行われた。

見慣れぬ人々

　沼は、児童の保護者への引き渡しが進む中、明らかに保護者ではなく、学校になじみのなさそうな人たちの存在に気がついた。声をかけてみると「つくば駅から来た」と言う。激しい揺れが襲った直後、つくばエクスプレスは臨時運休となり、間もなくつくば駅も閉鎖されたとのことだった。

　日が傾き、薄暗くなる中もつくば駅方面から吾妻小に来る避難者は続々と増え続けた。彼らは、東京方面からの通勤や筑波山に観光に、つくばエクスプレスを利用していた人々。いわゆる「帰宅困難者」だった。避難者は最大時には、７００名を超え、２１の教室に収容した。

　沼は当初、これほどまでの「帰宅困難者」が来校することは想定しておらず、特別教室で対応できると考え、つくば駅側の南門に近い家庭科室、第１理科室、音楽室を開放した。

　避難者を受け入れる動線は、学校関係者との交錯を避けるために昇降口は使用せず、それぞれの教室の外に面した扉から直接入ることとした。また、出入り口での混雑を避けるために下足のままで教室に入ることを認めた。

　しかし、それぞれの特別教室は、すぐに避難者であふれた。

職員の体制構築

　児童の引き渡しがある程度落ち着いたころ、沼は櫻井に「全教職員に“それぞれ自分の家族のことを考えるように”と伝えてください。」と言った。沼や櫻井にとって、児童の次に愛情を注ぐ教職員を想ってのことだった。また、併せて「学校に残れる者は、引き続き避難所の運営を協力してください。」と今後の体制を見据えた依頼をした。

　櫻井の伝達を聞き、それぞれの教職員が家族の安否を確認し、その後、２０名程の教職員が避難者対応を買って出た。

職員室での全体打ち合せの様子
写真提供：(独)防災科学技術研究所 坪川氏

　しかし、容易に電話がつながらない中、家族の安否が確認できないままに学校に残る者もいた。斉藤も高校生の息子と連絡を取ることができなかったが、彼の判断力を信じて学校に残った。息子は、停電で真っ暗になった家に一人で過ごすのが不安になり、近くのコンビニエンスストアで夜を明かしたことを、翌朝に帰宅して斉藤は知った。

吾妻小避難所　開設

沼は、増え続ける避難者に対応するため、北側校舎の１・２学年が使用している一般教室を開放することを決めた。北側の教室は、増築部分は６年前(平成 15 年)に建てられ、耐震性が確認されている。それ以外の部分も平屋建てであることから比較的耐震性能が高い、という庄司と坪川の助言を踏まえ、開放する教室を決めた。

教室の開放にあたっても、沼は、児童の視線での避難所を考えていた。児童は、校庭避難からそのまま保護者に引き渡され下校したため、一般教室にはランドセルはもちろん道具箱や白衣などが残されている。また、教室の掲示板には児童が一生懸命作った作品なども掲示している。沼は、避難者が教室に入ることで、それらを紛失したり、破損させたりしてはならないと考えた。教職員に指示し、児童の物を集め、「乙女の像」からプールに向かう方向に位置する３学年の教室に移動させた。そして、「乙女の像」から３学年の教室に向かう廊下は立ち入り禁止とした。櫻井は沼の指示の的確さに、緊急時だからこそ、児童のことを第一に考える姿勢を改めて感じた。

家庭科室、第１理科室、音楽室がいっぱいになったタイミングで、１・２学年教室を避難者に開放した。この時、櫻井の提案により、一番奥の教室は女性専用部屋とし、女性も安心して過ごせるように配慮した。

また、年配者や乳幼児を連れた避難者がいたことから、第２理科室と CAI 教室を優先部屋として解放した。CAI 教室は、コンピュータが置かれエアコンが設置されていることから、特に配慮が必要な避難者に充てた。優先部屋の開放にあたっては、体育館で使用している体育マットを床に敷き詰めた。普段は体育館に置いている体育マットが卒業式に備え、特別教室前の廊下に移動させていたことも幸いした。

避難者は、落ち着いている様子ではあったが、見知らぬ者同士が集った教室では会話も聞かれず不思議な静けさが漂っていた。

水の確保

地震発生直後に学校に駆け付けた庄司は、坪川とともに校庭避難のタイミングの助言をした後、次の行動へ移った。

「今後、ライフラインの供給停止が想定される」との坪川の指摘を受け、水の確保を急いだ。

電気は供給されており、校内放送なども使用できているが、地震発生直後には短時間ではあるが停電を生じた。またいつ停電になるかも判らない上、断水も懸念される。断水が発生すると、最も困るのはトイレが流せなくなってしまうことだ。

「日が沈み暗くなる前に、水を貯めなければ・・・」、ありったけのバケツや桶を集め、ひたすらに水を貯め置いた。

廊下に溜め置いたトイレ用の水。
写真提供：元教頭　櫻井氏

児童の引き渡しが一段落し、手の空いた教職員も手伝った。最終的に教室のゴミ箱や児童が花に水をやる際に使用するペットボトルなどにも水を貯めた。

この時、水の無駄遣いを防ぐ目的から家庭科室より柄杓を持ち出し、バケツに添えた。

さらに、坪川は、暖房用の灯油の備蓄量を確認した。そして、避難所開設が長期化した場合を踏まえ、今晩は何時頃まで暖房をつけていられるかを検討した。灯油はちょうど前日に補給されており、満タンであった。これを受け、この日は一晩中、暖房を入れたままとした。

避難者への対応

すっかり日が落ちた頃、市役所から水と非常食のビスケットが届いた。市役所の職員は、市内の状況を把握し、物資を運搬することで必死の様子であり、荷物を下ろすとすぐさま吾妻小を後にした。

配給にあたっては、教職員が各教室に運ぶことはせず、避難者に協力を仰いだ。具体的には、各教室で代表者を決め、教室内の人数を確認した上で、代表者を中心とした数名が「乙女の像」まで配給物を取

りに来ることとした。教職員の限られた人員で数百名の避難者を対応するには限界があるための対応であったが、避難者数などを把握しつつ避難者同士を繋げるための措置でもあった。避難者数の規模はこの時、初めて把握された。

さらに避難者は情報を求めていることがわかった。彼らは今、何が起こっているかを殆ど知らず、不安な様子だった。しかし、避難者の質問に答えるなど、彼らの要求に個別に対応していては、それだけで教職員は疲弊してしまう。坪川は各教室のテレビのスイッチを入れることを提案し、すぐさま実行に移された。テレビは旧式のブラウン管タイプだったが、地上放送の完全デジタル化への移行(平成23年7月24日)直前だったため、受信することができた。テレビがない教室にはラジオを配置した。

避難所となった教室の様子。多くの避難者が壁面上部のテレビを眺めている。
写真提供：(独)防災科学技術研究所 坪川氏

また、校内に設置されている１台の公衆電話には長蛇の列ができた。携帯電話は繋がりづらい状況が続く中、公衆電話は比較的、繋がりやすいようであり、緑の公衆電話の重要性が再認識された。

避難者への連絡は、校内放送を積極的に使った。避難者への指示やお願い、配給などの案内は、彼らを落ち着かせる意味合いから「女性の声が良い」とし、櫻井がアナウンスを担当した。櫻井は役割の趣旨を踏まえ、終始丁寧な言葉遣い、ゆっくりとした口調のアナウンスを心がけた。一方、交通情報などは、情報収集にあたった教務主任の根本がアナウンスを担当した。これにより、比較的重要な事務連絡は、男性の声でアナウンスされることが避難者に浸透していった。

深夜まで続く対応

日が沈んだ後も続々と吾妻小に集まってきた避難者の波は、午後９時を過ぎた頃にはほぼ収束したが、その後もポツリ、ポツリとやってきた。

食事の配給を終えた沼は、防犯にも気を配った。校舎外や学校周辺のパトロールは、おやじの会を中心とした吾妻小児童の保護者が協力して行った。おやじの会は、当年度の秋に発生した学校への不審者侵入事件を契機に発足した組織で、夜間パトロールや校内樹木の剪定などのボランティア活動、もちつき大会などの懇親会を実施してきている。夜間パトロールは、これまでの経験から、見るべきポイントやルートなどが明確になっており、スムーズに行われた。

パトロールをしていると、学校の入口を捜している避難者や学校の様子を心配して集まった他の保護者に遭遇した。

一方、校舎内は、４つのエリアに分け、それぞれのエリアに２名の教職員を避難者の見守り係として配置した。校舎内では、飲酒を始める者、必要以上に若い女性教師に話しかける者が見られたが、おやじの会の保護者などが対応にあたり、大きなトラブルには至らなかった。

沼は、教職員の見守り当番は１～２時間程度で交代し、適切に休憩・仮眠をとるように各教職員に求めた。しかし、当番表などを作成する余裕はなかった。このため、一部の教職員に負担が偏っていたであろうことを沼は後に悔いた。また、教職員が休憩・仮眠する部屋は、職員室の２階に位置する特別支援教室を充てた。この部屋はカーペット敷きであるため、横になれることが大きな理由だったが、避難者の目に触れることがない部屋を確保することで、しっかりと休息を取って貰う狙いもあった。

避難者たちは、当初から秩序を保ち、落ち着いた様子を見せていたが、限られたスペースで長時間じっとしていることは、疲労感や多くのストレスを感じ、楽なものではなかったはずである。坪川は、新潟県中越地震で報告されたエコノミークラス症候群を懸念し、なるべく体を動かすよう避難者に伝えることを櫻井に進言し、時折、校内放送でアナウンスされた。

深夜の校舎は、廊下を残して消灯とし、消灯時刻の目安は２２時としたが、教室毎に避難者で話し合って決めて貰うこととした。２２時に櫻井が震災当日最後の放送を入れ、ほとんどの教室の電気は消さ

れ、震災の夜は更けていった。

朝の喧騒

３月１２日となり東の空が白み始めた頃、避難者の中には自ら行動を起こす者がいた。徒歩で自宅を目指す者、駅に電車やバスの運行状況を確認に行く者、朝から避難者も教職員も慌ただしく動き出した。

そんな中、つくばエクスプレスは未だに運行再開の見通しが立っていなかったが、JR 常磐線が一部区間で運行することやつくばセンターから臨時バスが出る、といった情報がもたらされた。

根本はすぐさま、それぞれの情報を確認したところ、JR 常磐線では上野～取手間が９時より運行を再開し、関東鉄道バスがつくばセンターから取手駅までの臨時バスを 8 時 30 分から運行することが判明した。

避難者への重要な連絡として、根本がアナウンスすると、人々が堰を切ったように動き出した。家路を急ぐ人の列が、吾妻小からつくばセンター方面に伸びていった。

吾妻小避難所　閉鎖

一部ではあるが公共交通機関の運行が再開したことで、避難者は２０名程となり、吾妻小避難所は大幅に規模を縮小し、彼らを低学年棟の一つの教室に集めた。

残った避難者は、吾妻小近隣の住民や茨城県北部の住民などの運転を再開した交通機関の反対方向への帰宅を求める者であった。

昼頃には市からの食料の支援物資が届いたが、沼は届けられた物資を見て驚いた。市内の有名洋菓子店のケーキが食糧支援として届けられたのである。沼は、驚く一方で、市役所の担当者が少しでも多くの食糧を確保しようと尽力した結果、洋菓子店にまで協力を仰いだことに感心するとともに、本当に大変な災害であることを再認識した。

午後からは、昨晩から残ってくれた教職員、家族の無事を確認した後に戻ってきた教職員の手で、避難者に開放された教室を本来の姿へと戻す作業を進めた。

地震発生から３日目の朝には、すべての避難者に帰宅する目処が立ち、吾妻小避難所は二晩で閉鎖することとなった。

エピローグ

地震発生から子ども達の避難、保護者への引き渡し。そして避難所の開設、運営と矢継ぎ早やに過ぎ去った日々を振り返り、沼は思った。

「防災教育をしていてよかった。児童の避難、保護者への引き渡し、避難所の運営など、スムーズに進めることができた」と。

２０１１年３月、震災直後からの出来事は吾妻小にとって忘れ得ぬ出来事であり、決して忘れてはならない３日間だった。

数日後、たくさんの手紙が届いた。見ると、吾妻小で一夜を過ごした人たちからのお礼状だった。中には夜を徹して対応をしてくれた関係者へのお礼の言葉とともにノートや図書券を同封して、児童らに教室を借りたことに対する感謝の気持ちを表すものもあった。

櫻井は、今もこの手紙を大切に保管しており、見る度に避難者の感謝の気持ちを思い出す。そして、震災当時の話をするときや教職員をねぎらう際には必ずこれらを紹介している。

謝辞：元吾妻小学校長　沼先生、元吾妻小学校教頭　櫻井先生、元吾妻小学　関口先生、吾妻小学校　齋藤先生、元吾妻小学校 PTA 会長　庄司様、防災科研　坪川様、吾妻小元児童　長屋さん、貴重な体験をお聞かせいただくとともに本資料の制作にご協力いただきありがとうございました。
製作協力：(株)建設環境研究所　**参考文献**：「つくば市 東日本大震災の記録」平成 23 年 12 月

東日本大震災における小学校の対応：山田町立山田南小学校の場合

～津波災害を受けた地域における負傷者対応、避難所対応および学校の再開～

よぎる不安

平成２３年3月９日１１時４５分頃、三陸沖、深さ約８キロを震源とするマグニチュード 7.3 の地震が発生した。山田町では震度４を観測。大きな被害は報告されなかったが、大船渡では 60cm の津波が観測された。

山田町立山田南小学校長は、この地震の発生をうけ“今一度、地震や津波に対する備えを確認しなければ”と考え、翌日の１０日には、“地震発生時の学校の対応”を記した手紙を全児童に配布した。この手紙は、毎年４月の入学、進級時に配布しているが、校長は間近に迫る巨大地震を暗示するかような不安を感じ、再度配布した。

そして、１１日の職員朝礼では、“登下校中に地震に遭遇した場合は、津波に備え、すぐに学校に向かうように”と児童へ周知することを各クラス担任に指示した。

山田町は、役場などの主要施設が立地する中心部が、山田湾沿岸にある。山田南小学校は、町の中心部でも山側(海岸から約 1.2km)の高台(海抜 14m)に位置し、津波が来襲した際も安全な場所として、児童、学校関係者はもちろん、地域住民にも認識されていた。

先生たちへの感謝の会

３月１１日の午前、校舎の２階は、ひと際にぎわっていた。卒業を控えた６年生５４名が、４月から始まる中学校生活に期待で胸を膨らませつつ、午後３時半から行う「先生たちへの感謝の会」の準備をしていた。家庭科室では、心をこめてサンドイッチを作り、会場となる図書室では、彩りの花飾りなどを整えていた。

副校長は、彼らとの思い出を振り返り、感謝の会ではどんな話をしようかと、その様子を眺めていた。また、窓には、校庭に向けて「先生ありがとう」と大きな文字が張られた。後にこの文字は「山田南小がんばろう」に変わる。

いつもとは違う、ただ事ではない揺れ

午後になり、校長は、校長室で担任から提出された通知表に目を通し、一人一人の児童の顔を思い浮かべながら１年間の成長を思い返していた。

そんな中、揺れを感じた。しばらく様子を見たが、次第に大きくなり、収まる気配がなかった。

１４時４６分、国内観測史上最大となるマグニチュード９．０、東北地方太平洋沖地震発生

いつもとは違う長い揺れに、“ただ事ではない”と直感した校長は、隣の職員室に飛び込み、残っていた教職員にテレビを付けるように指示をした。しかし、テレビからの反応は無かった。三陸地方は、地震発生とほぼ同時に停電に陥っていた。

校長は、揺れが少し収まったのを見計らい、「子ども達を校庭に避難させてください」と指示を出した。

停電で校内放送は使えない。教務主任が避難指示を直接各クラスに伝えるため、職員室を飛び出した。

「先生たちへの感謝の会」を予定していた６学年以外のクラスは、帰りの会の最中に地震に見舞われた。教務主任の伝達を待たずして、担任の判断で避難を始めている児童もいた。

そんな中、二年一組の児童は、帰りの挨拶を済ませ、既に校舎を後にしていた。その報告を受けた校長は、すぐさま校舎を飛び出したが、踵を返して学校に戻って来る小さな児童の姿が目に入ってきた。彼らは、朝、担任を通して聞いた校長の教えを忠実に守っていた。校長は、彼らに駆け寄り「大丈夫だよ」と声をかけ、校庭に誘導した。

山田町から離れ

その時、山田南小に長男(２年生)が通う小原は、横浜のみなとみらいにいた。翌日に行われる親類の結婚式のため、朝、山田町を出て、結婚式会場のホテルに到着した直後に地震に遭遇した。

小原は、山田町のこと、山田南小のことを案じ、直ちに帰ろうとした。しかし、東北新幹線をはじめ関東地方の交通機関も臨時運休となったため、ホテルに留まりテレビの画面を見つめることしかできなかった。

ホテルには、予約が入っていた１３日まで滞在し、その後、関東地方の親類宅に身を寄せた。１４日の朝、前日の夜から運転を再開していた上越新幹線で新潟まで行き、鉄路で新潟から秋田を経由して大曲まで移動した。大曲からはタクシーで盛岡まで戻り、盛岡からは、置いていた自家用車を飛ばした。小原が山田町に帰ってこられたのは、１６日だった。

東京湾内にも津波警報が発令され、海に隣接するホテルは、とても結婚式を執り行うことができる状況ではなく延期となった。延期された親類の結婚式は、一年後に執り行われた。

人と自動車であふれる校庭

校庭に避難した児童は、直ちにクラスごとに整列した。点呼を行い、当日の登校児童３０２名全員の無事が確認された。

一方、児童が避難している最中にも、わが子を迎えに来た者、津波に備え避難をしてきた者など、多くの人々が校庭に集まってきた。

自家用車で山田南小を訪れる者も多数おり、車が自由に出入りできる校庭には、次々と車が乗り入れ、その数は１００台を超えた。校庭に入ろうとする車がある一方、町の様子を確認するためか、再び出て行こうとする車もあり、校庭と学校前の道路は混乱し、一人の男性教員が、自動車の整理に追われた。

このため、児童は、往来する自動車を避けるように校庭の隅へ隅へと追いやられた。

校長は、学校が災害発生時の避難所に指定されていることは認識していたが、人々が自動車で乗り付け、校庭を行き交う事態は想定していなかった。

児童の引き渡し

全児童の無事が確認され、保護者からは、児童の引き渡しを求める声が出始めた。混乱し、尋常ではない状況から“保護者に引き渡すことが子ども達にとって最善である”と副校長も考えた。

しかし、山田南小では、緊急時を想定して児童を保護者に直接引き渡す訓練を実施したことが無かった。校長は、教職員と児童の保護者への引き渡し手順について協議した。

なによりも困ったのは、引き渡しの記録を残す名簿類が手元にない事だった。

津波が来襲している山田町の様子(地震発生から約 30 分後)。左手の赤い屋根が山田南小学校。
校庭に多数の車が乗り入れ、児童が校庭奥に避難している様子がわかる。

出典:「あの日から明日に向かって」東日本大震災 山田の記録
写真提供:山田伝津館

各担任も急いで校庭に避難したため、何も持ち合わせていない。校舎の安全も確認されていない中、各教室に児童名簿を取りに戻ることは困難だった。その時、教員の一人が毎日の児童の体調を記録する健康観察表の存在に気づいた。健康観察表には、全校児童の氏名が記載されており、校舎一階の保健室で管理されている。校長は、直ちに教職員の一人を保健室に走らせ、健康観察表を児童引き渡しの確認記録簿とするよう指示した。

副校長は、ハンドマイクで保護者らに整列を呼びかけ、アナウンスをした。

「これから、保護者に児童を引き渡します。各家庭で安全な場所に避難をしてください。」

児童の引き渡しは、保護者の協力もあり順調に進んだ。

その頃、山田湾の方向に、黄色がかった土煙のようなものが見えた。それは、町を無残な姿形を変えてしまう「津波」によるものであり、津波は山田南小から 200m の距離まで迫っていた。

学校から避難所へ

山田南小に集まった地域の人たちは、津波の来襲に備え、学校に留まった。また、児童の引き渡しを受けた保護者の多くも我が子とともに学校に留まっていた。

校長は、避難者の対応には、町役場から指示があると認識しており、“行政の担当者はいつになったら来るのか？、役場は何をしているのだろう？”という思いを募らせていた。同じ町役場にある、教育委員会からは、「子ども達は大丈夫ですか？」と担当者が様子を見に来ていた。

そのような中、校庭に集まった人々からは、“日没を前に学校の建物に避難したい”、という声が出始めた。校長は、“我々で何とかしなければ”と考え、副校長に「体育館を開放してください」と指示した。

副校長が、数名の男性教職員を伴って体育館に入ると、既に避難者がおり、フロアの半分ほどを占めていた。副校長は、不安な表情で身を寄せる彼らに「すみません」と声をかけながらブルーシートやマットを敷いた。避難者も副校長たちを手伝ってくれた。また夜の冷え込みに備えて、カーテンを取り外し、暖を取る寝具の代わりとした。校内にあるものでは数に限りがあったからだ。それでも、全く足りず、津波による被害を受けなかった学校近隣の住民が毛布などを持ち寄り、分け合った。

先生と夜を明かす子ども達

日没を迎えた１７時３０分頃、保護者に引き渡すことができない児童が６０名程いた。その頃、隣接する「さくら幼稚園」の園長より、幼稚園の小ホール提供する申し出をうけ、児童を移動させた。日が沈み冷えてくる前に、相変わらず車が出入りする校庭から身を寄せるには、最適の場所であった。

その後の児童の対応には、女性教員があたった。不安を募らせる彼らに、母親のように接してもらうための措置であったが、彼女もその趣旨を踏まえ、児童に寄り添い、励ましつづけた。

残った児童の夕食は、「感謝の会」のために６年生が作ったサンドイッチを食べた。

全ての児童を保護者に引き渡すことができたのは、地震発生から３日目の３月１３日のことだった。

野戦病院と化した校舎

子ども達の引き渡しや、体育館の避難所開放が進む中、校舎には津波で負傷した人たちが次々と訪れていた。その状況を聞いた校長は、「校舎は、負傷者のために開放してください」と伝えた。

学校には、近くで個人開業している２名の医師も避難してきており、負傷者は白衣の医師を見つけるとすがるように助けを求め、保健室は臨時の診療所となった。

当初、保健室が医師の診察室、校長室と保健室の間の部屋が重傷者用の部屋となり、15 人ほどの患者が入った。しかし、負傷者は増え続け、校舎１階の教室は次々に病室と化し、さながら野戦病院の様相を呈していた。

負傷者は、背負われてくる者、自家用車に乗せられてくる者、救急車で運ばれてくる者、様々であった。中には自力で歩いて学校までたどり着き、校舎に入るなり「寒い」と叫び、横たわって動けなくなる

者もおり、医師による心臓マッサージが施された。

負傷者の多くは、津波による海水を全身に浴びており、低体温症の危険があった。医師は、養護教諭にゴミ袋の提供と湯沸かしを指示した。ゴミ袋に湯を入れて患者の体を暖める湯たんぽとするためだった。山田南小はプロパンガスだったため、地震後もガスを使うことができた。また、断水していたものの貯水タンクにはまだ水が残されていた。

保健室の医療行為では、器具類が全く足らず、それぞれの医師が病院から道具や薬を持ち寄ったが、できることは限られていた。しかし、日が沈んだ後は、真っ暗となり、それすら困難となった。

病院の待合室となった校舎廊下の様子。3/15 撮影。
写真提供：小原氏

そんな中、教職員の一人が「建設関係の事務所なら、発電機があるのでは？」と、山田南小児童の保護者が営む工務店に車を走らせた。２台の発電機と投光器を借り受け、１台は校舎での医療用とし、もう１台は体育館に運び、避難者の暖房器具用とした。

発災翌日になると、医師は、校舎内の衛生状態の悪化を懸念した。断水によりトイレが流せないことで病原菌などの蔓延が危惧されたためである。“屋外に穴を掘ってトイレを設けた方が衛生環境としてはむしろ良いのではないか”と医師は校長に進言した。これを受け、翌朝に男性教員らにより、学校裏手の土手に穴を掘った仮設トイレが作られた。

また当初は、校舎に土足で入ることを認めていたが、土埃がひどくなり、ほどなく土足禁止となった。

さらに、地震発生から数日が経過すると、避難所内でインフルエンザやノロウィルスの疑いのある患者が発生し、救急車で搬送されて来ることもあった。このため、放課後の学童保育に使用されている、廊下を扉で隔てられた部屋を隔離室として利用した。

山田南小学校は、４月１５日まで「山田中央救護所」と呼ばれ、全国より医療スタッフが入った。１～３階の各教室・特別教室は内科、整形外科、小児科、耳鼻科、歯科、眼科、精神科、入院病棟、隔離室、薬局となり、校舎全体が震災直後における山田町中心地区の医療機関の役割を果たした。

機能を失う町

地震発生当日の日が暮れたころ、山田南小に消防車がやってきた。校長は、山田南小の惨状を聞きつけ、消防署から応援が来たと思った。

しかし、消防署員の第一声を聞き、耳を疑った。「職員室を貸してください。臨時の山田町消防本部にします」、津波により山田町消防署が被災し、機能が失われているためだった。

消防署員に、「机を出してください」と言われ、校長は、職員室の長机を提供した。彼らは、手際よく無線機などを並べ、無線による情報連絡を始めた。

職員室にいた校長や教職員の耳にも「山田南小に怪我人を搬送する」とか、「大浦方面で火災発生」と言った情報が入ってきた。時には消防無線の警報が職員室に鳴り響いた。

山田町沿岸部は、想像を絶する状況になっていた。１０メートル近くの津波が山田湾一帯に押し寄せ、沿岸部の役場や消防署、病院など公共施設が機能を失っていた。

町役場では、駐車場となっている地下１階(通常の地上レベル)が津波による浸水を受け、公用車は１台を残して全て被災した。このため、役場職員は、身動きを取ることができなくなっていた。また、地下１階に配備されていた電気施設やボイラーなどの機械施設も被災した。その後、大規模な火災も発生した。

山田町役場は、ほぼ孤立状態で岩手県庁との情報伝達もままならない状況の中、一台の小さな発電機を頼りに、情報収集に奔走していた。迂回をすれば町役場から山田南小までのルートは確保できたが、町の職員が山田南小に駆けつけるどころの状況ではなかった。

校長は、情報が錯綜する中、無線で各方面とやりとりをしている消防署員から「自衛隊に連絡しまし

た。緊急支援物資が間もなく届きます」と伝えられた。
「山田町消防本部」は、３月末まで山田南小学校に置かれた。

おにぎりを分け合う

消防署員の伝達を聞いた後の夜８時頃、自衛隊が水と毛布 80 枚を持ってやってきた。
水は給水車から 10 リットルずつ、ポリ袋に入れて渡された。「倒すと、流れてしまいます」という自衛隊員の注意を聞き、男性教諭らが協力して運んだ。そして、避難者が自由に飲めるように、ウォータージャグに入れ、体育館に置いた。水を飲むための器は、茶碗や紙コップを学校中からかき集めて使用したが、何百人もいる避難者にどれほど行き渡ったか解らない。
また、暖を取るための掛け物も、既にカーテンなどを外して使用していたが、自衛隊が持ってきた毛布を配布しても、全く足りない状況であった。
校長が、自衛隊員に今後の支援などについて尋ねると、「今、豊間根で炊き出しをしているので、間もなく届きます」と回答があり、深夜におにぎりが届いた。しかし、停電して真っ暗な体育館では、配ることができず、夜が明けてから避難者に配給した。配給は、避難者に並んでもらい教職員が手渡した。
当初は、一人２個ずつ配布したが、途中で全員に行き渡らなくなりそうになり、「ごめんなさい、１個ずつにしてください」と言って、調整した。それでも、全員に配布することができず、「足りないので、分けあって、食べて下さい」と声をかけたところ、年配者らが「私はいいから、子どもたちに食べさせてあげて」と申し出てくれた。
また、校庭に自家用車で乗り入れ、そのまま残っていた避難者にも、校長が一台一台ノックをして、「大丈夫ですか？」と声をかけながらおにぎりを渡していった。
教職員は、避難者のために配給作業を黙々と行ったが、そのおにぎりを食べることはなかった。彼らが、食料を口にすることができたのは、１２日の夕方であった。
校長は、一つのおにぎりを仲間の教員と半分に分けて食べたが、それまでの慌ただしさの中、食欲は全く感じていなかった。一方、副校長は、その時口にした、具も何も入っていないおにぎりのおいしさが、忘れられなかった。
校長は、これまで、学校が避難所になるということは、避難者の方のためのスペースを開放すればよいと考えていた。しかし、それは“避難者のための生活、生きることのすべてを支えること”だと痛感した。
後に、山田南小学校は、「山田南小学校避難所」として、隣接する「さくら幼稚園」、「武徳殿」」とともに避難所指定を受け、最大時の避難者は 1,170 名を数えた。

張り詰めた気力の限界

山田南小の教職員にとって、突如として訪れた避難者への対応。彼らは、「自分たちが頑張って避難者を支援しよう」と互いに声をかけ、疲労と戦いながら献身的に動きまわった。
食料の配給はもちろん、トイレの清掃といった細かいことまで対応した。
また、避難者の間には、食料の配給時に「配給が遅い」とか「あの人は２個とった」という小さなトラブルも生じ始めており、これらの対応で教職員が苦慮する場面もあった。
そのような中、問題が発生した。２日目の夜に、女性教諭がトイレ用の水をプールに汲みに行き、足を踏み外し、怪我をしてしまった。
その一件を聞いた校長は、“教職員を奉仕者とした今の避難所の体制は限界に来ている。長期化も想定され、避難者による自主的な運営組織を作ってもらう必要がある”、と考えた。
また副校長も、役場の職員すら来られない状況の中、同様の思いを持ち始めていた。そして、校長と副校長は、避難者との対話の計画を立てた。
震災発生から３日目となる１３日の午後。校長は副校長を伴い、決意を持って避難者が身を寄せる体育館に向かった。

最初に、副校長が発言をした。「お願いがあります。我々学校の職員は皆さんの生活を支えるべく、食事の配給やトイレの対応などを一生懸命やっておりますが、どうにも追いつきません。皆さんの中でこの避難所の運営を手伝っていただける方は、いらっしゃいませんか？」と、優しくも切実に訴えた。

副校長は、“校長の発言は、最終的な決定事項と認識され、避難者に一方的な依頼をしたと受け取られるのでは”と考え、校長の言葉は“最後の砦”と位置づけ、まずは自らが口を開いた。

そして校長が副校長の説明を補足するように、「皆さんがこの場所で助け合って生活し、食事も平等に渡るよう、自主運営組織を立ち上げてください。力を貸して下さい」と訴えた。

校長と副校長は、避難者の中から避難所のリーダー的役割を担う人物が名乗り出ることを期待した。しかし、最初は、誰も応えられなかった。混沌とする避難所で、自ら名乗り出て中心的存在になるのは、誰しもが躊躇する状況であった。

そのため、それまでにも自発的な協力者がいた食料配布の担当を呼びかけたところ、数名の女性が名乗り出てくれた。その後、掃除担当、施設担当などの役割を決めていった。

また、話し合いの中で、“避難者の出入りが激しい状況から、名簿が必要なのでは？”とアイディアが出され、その事務処理担当を申し出る者もいた。こうして、一つ一つ、必要な仕事と担当者が避難者自らの手で決められていった。

遺体安置所

様々な問題に対応する中で、別の大きな問題も持ち込まれた。

消防本部より町からの依頼として、「遺体安置所」を設けたいとの申し出を受けた。

「山田中学校や豊間根の体育館を遺体安置所にしているが、犠牲者が多すぎて間に合わないかもしれない。山田南小学校にも遺体を安置させてもらえないか？」

校長や副校長をはじめ全ての教職員が難色を示した。ひとたび、学校を遺体安置所としてしまうと、再開したときの子ども達への影響は計り知れない。

一方、副校長は、「いざとなれば仕方がない」と、腹をくくった考えも持っていた。なぜなら、ラジオは、“山田町の犠牲者は数名”と伝えているにもかかわらず、目の前でもっと多くの人たち息を引き取る惨状を見ており、町中が大混乱していることが容易に想像できたからである。

校長は、山田南小には、既に多数の負傷者や行方不明の家族を探し続けている避難者がいたことなども鑑み、「それは、最終手段としてください」と伝えた。

校長と副校長は、残されたスペースが限られている校舎内を見渡し、「もしもの時はこの場所ですね」と“聞こえと言葉の教室(特別支援教室)”横にブルーシートを敷き準備をした。そこは、校舎内を往来する人から比較的死角となる場所でもあった。

数時間後、消防の担当者より「先ほどのお願いは、無くなったと連絡がありました」と伝えられ、職員室の一同がほっと胸をなで下ろした。しかし、臨時医療施設となった山田南小学校では、何人もの負傷者が息を引き取っている。

子ども達の安否確認

校長をはじめ、全ての教職員は、常に子ども達の所在が気になっていた。

山田南小に避難している子ども達は、顔を合わせる度に「元気だよ」と声をかけてくれる。学校に避難していない児童について「どこにいるか知ってる？」と子ども達に教職員から質問をしたり、顔を合わせた保護者に問い合わせをしたり、避難所の世話をしながら児童の所在を確かめた。

地震発生から４日目の１４日には、盛岡教育事務所管内から３名ほどの支援員が派遣され、「避難所の方は私たちでフォローするから、先生達は学校の子どものことをやってあげて」と申し出た。これにより、山田南小の教職員は、本来の学校業務を優先できる見通しが立った。不眠不休での避難所の支援から休養をとり、児童の安否確認、学校再開に向けての作業に専念した。

３月１５日には、町役場から届いた文書で、山田町内の避難所は全部で３１ヵ所であることと、その

場所が判明した。それを基に、全ての避難所に教職員を派遣し、児童の所在確認を進めた。しかし、ガソリンが枯渇する中、被災した沿岸部を迂回しなければならず、町内の道路事情に詳しくない岩手県内陸部出身の教職員も多く、避難所訪問は困難を極めた。

また、校長が、町役場に赴いた際に避難所名簿があるのを見かけ、「あ、ここに山田南小の児童がいる」と声をあげたこともあった。

まだ、電気は復旧しておらず、作業は明るい時間帯に限られ、思うように進まない中、児童一人一人の避難先を確認し、山田南小学校在籍児童の避難・連絡先名簿が取りまとめられた。

母校で出来た卒業式

児童の所在が明らかになるにつれ、全ての学校関係者が、何とかして子ども達に卒業証書と修了証書を渡したいと思うようになっていた。

特に、卒業式は、誰もが“子ども達を母校から巣立たせたい”と山田南小での実施を強く要望した。離れた場所に避難している保護者も、道路事情が厳しい中、「学校まで子どもを送っていくから」と申し出、山田南小での開催を後押した。

校長は、関係者の協力を得、卒業式を２３日に山田南小で、１～５学年の終業式を２２日に山田南小と山田高校の２か所で執り行うことを決定した。

卒業式と終業式の開催を知らせる手書きのポスターを校長は自ら作成し、児童が身を寄せる避難所に張り出すよう、教職員に指示した。

卒業式当日、会場の山田南小学校図書室には、全ての卒業生が集まった。ジャージ姿の卒業生もおり、“本当に普段着の卒業式だなぁ”と副校長は感じた。

卒業式では、一人ひとりの名前が呼ばれる度に、会場は大きな拍手に包まれ、“よくみんな頑張った。とても良い卒業式だな”と誰もが感動した。

あまりにも変化の大きかった山田南小学校の平成２２年度は、校舎に響く拍手と共に終わりを告げた。

避難所の自治

避難者らは、校長と副校長の呼びかけにより、自ら率先して動くようになっていたが、直ちに自治を持った避難所運営に移行できたわけではなかった。

校長が避難者と対話をした翌々日の１６日に山田町に戻ってきた小原は、体育館の避難者が「寒い、寝具が欲しい」と言っているのを聞いて驚いた。なぜなら、校舎内には、支援物資として届けられた毛布が、山と積まれていたからである。小原は、「どうしてこれを配らないのだろう」と不思議に思い、すぐさま避難者に配布した。避難者らは、自ら周辺を見回し、目と鼻の先にある支援物資の存在にすら気づけない状況であり、ましてや自主的な運営組織を作っていくことは困難であった。

避難所となった体育館の様子。
自治が確立し通路なども作られた。
写真提供：小原氏

その頃、町役場からは、常時３人ほどの職員が連絡員として、山田南小に詰めていた。彼らもまた被災者であり、町中を巡りながら入れ替わりで山田南小にきている状況であった。このため、避難者の要望などには、「持ち帰り、検討します」と答えざる得ないこともあり、避難者の中には、「要望が全然通らない、話がわかる人はいないのか！！」と憤る者もいた。

また、町内会のリーダーなどが音頭を取って、生活の基本的なルールを決めた。しかし、彼も避難所の支援者として“通い”でやってくる状態であったため、体育館で２４時間過ごしている避難者とは、温度差のようなものを生じることがあった。

町役場に勤務する小原は、それまで来ていた役場職員から業務を引き継ぐ形で山田南小避難所と町役

場の連絡窓口となったが、山田に戻ってからの３週間ほどは山田南小で避難者と寝食を共にした。実は、小原の自宅は、学校近くにあり、津波と火災による被害を受けなかったため、自宅で休むことも可能であったが、避難所の様子を見て、夜も学校に留まった。彼が常に身近にいることで、避難者は、気軽に話ができ、次第に不平、不満は収まっていった。

また、小原は、常に「避難所の自治会を作っていきましょう」と避難者に伝え続けた。

例えば、体育館の居住スペースの境界である通路で区分けした班を編成し、ゴミの処分や掃除などの仕事は、班毎の当番制とした。また、“一食は自分たちで用意する”として朝食をそれに充てた。

当時、夕食はお弁当の支援が来ていたこと、昼食は多くの避難者が働きに出るため高齢者と子どもの分としてパンなどの配給で対応できたこと、を踏まえるとともに、避難所の実情にあわせた提案をした。

こうして、４月頃には、避難所内に本格的な自治組織が確立し、小原も夜は自宅に戻るようになった。その後も彼は、３ヶ月ほど日中は山田南小に通い、避難者を支援した。

「山田南小避難所は、小原の城だ」と揶揄されたこともあったが、小原は、避難者のためにという思いを強く持ち、避難所で中心的存在として奮闘することに対する、褒め言葉と捉えた。その後、小原は、地域と学校、さらに行政とのパイプ役としての実績が評価され、山田南小の PTA 会長を務める。

山田南小学校再開

卒業式と修了式を終えた山田南小学校は、平成２３年度のスタートへの舵を切った。校長は、本格的な学校再開に向けた調整を教育委員会などと重ね、始業式を４月２０日、入学式を翌２１日と決めた。

しかし、未だ、校舎３階までは「山田中央救護所」としての機能を果たしていた。そのため、校長は、地震発生直後から山田南小での医療に携わっている地域の医師や小原に、学校再開に向けた病院機能の体制について相談した。彼らは、全国から山田南小に入れ替わり入ってくる医療スタッフとは違った立場から、地域のため、何より子ども達のためを考え「４月１５日までに撤退できるよう、何とかします」と、校舎を開放する決意を表明してくれた。

予定通り「山田中央救護所」は、４月１５日に閉鎖され、医師と患者らは正規の医療施設に移動した。

翌日の１６日には、校舎の掃除や消毒作業、１７日には、教室を元の姿に戻すべく机・椅子の移動や資料の準備などが行われた。これらの作業には、比較的被害が少なかった町内の小学校の教員が、手伝いのために山田南小を訪れた。

校長は、新しい年度を迎えるにあたり、各学年の学級編成と担任教員の配置を行った。

まず、新年度の児童数を確認したところ、２５４名(４月３日時点)となっており、震災前から５０名ほど少なくなっていた。校長は、転校していった児童のほとんどが「さよなら」も言えずに山田南小を去ったことに胸を痛めた。

また、新年度の学級編成にあたっては、避難所や親戚宅などで生活する児童も相当数いたことを踏まえ、子ども達の現状を把握する目的で、前年度の担任教員を家庭・避難所訪問に向かわせた。

さらに、児童の学校生活と避難者の生活の動線が交わらないような、学校と避難所の共存環境に配慮した体制づくりを検討した。検討にあたっては、体育館をはじめ、「さくら幼稚園」、「武徳殿」」で約４００人が避難生活を送っていること、校庭には依然として避難者や災害対応の車が並んでいること、そして仮設住宅の建設が決まったこと、などを多角的に考慮した。

こうして、様々な問題を解決し、４月２０日、校舎の２階の図書室前のオープンスペースでの始業式ではあったが、平成２３年度のスタートを切ることができた。さらに、翌２１日は、図書室で入学式を挙行した。

仮設住宅の建設

学校の再開に向けた体制作りと平行して、校長には新たな問題が突きつけられていた。町役場より、山田南小の校庭に仮設住宅を建設するための協議が持ちかけられていた。

当初、より多くの仮設住宅用地を確保するため、校庭全ての使用が申し入れられた。なお、被災自治体の多くでは、校庭の全てが仮設住宅で埋められている。

校長は、“山田町の状況を考えると、致し方ない”と思う反面、体育館が避難所になっているため、「児童が体を動かす場所をなるべく広く確保してください」と、申し入れた。

協議の席では小原は、“一刻も早く、一戸でも多くの仮設住宅を提供したい”という町役場の担当者の立場、学校としての立場、ともによく理解できたため、その意見調整には頭を悩ませた。

その結果、山田南小では校庭の半分を残して仮設住宅が建設されることとなった。協議結果を踏まえ、校長は、どのように校庭を残すかを思案した。子ども達の遊びなどを考慮すると、遊具の多くが設置されている校舎から離れた遊具周辺を校庭として残し、校舎側に仮設住宅を建設した方がよい。しかしそれでは、休み時間などに職員室から子どもの姿が見えなくなる恐れがあり、動線の交錯も懸念された。

最終的に子ども達の安全に配慮した配置として、校舎から離れた道路側に仮設住宅が建設された。

山田南小学校避難所の解消

仮設住宅は、６月から工事が始まり、まもなく完成した。山田町内に建設された仮設住宅の提供も始まり、体育館の避難者は、徐々に減っていった。

校長は、“一日でも早く、学校を元の姿に戻したい”と思う一方、“笑顔で次への一歩を踏み出していただきたい”と避難者を気遣い、性急な避難所閉鎖は求めず、その対応は小原に一任した。

小原は、４月の学校再開以降、避難所としての区域と子ども達のための区域をどのように分け、学校を元の姿に戻していくかを日々の課題とし、避難者に丁寧に説明した。

そして、夏休み期間中の８月１７日に、山田南小学校避難所は閉鎖された。

校長は、避難所としての毎日が大変であったにもかかわらず、“いつも誰かが体育館にいるというのは、不思議な安心感があったな。誰もいなくなってしまう感覚は、寂しいな”と体育館の鍵を閉めながら思った。

隣接する「さくら幼稚園」および「武徳殿」の避難所もほぼ同時期に閉鎖された。

その後の山田南小学校

震災後の山田南小学校では、子どもの心のサポートを学校運営の中心に据え、「元気の発信」、「学力・体力の向上」、「心のケア」という３つのねらいに、「現実を受け入れ、その中で最大限に工夫・努力する」、「同じ目標に向かって取り組む」、「いろいろな人と関わる」の３つの体験の場を組み合わせ、教育活動を行っている。

学校再開直後の体育館や校庭がほとんど使うことのできない状況下でも、様々な工夫をして体育の授業が行われた。さらに、山田南小の自慢である伝承活動「虎舞」の発表を７月に実施した。練習時よりお囃子、太鼓に誘われて多くの見学者がいたが、本番では 200 名を超える来校者に、子どもたちの元気な姿を披露した。

また、あいさつ運動に体育館の避難者に参加を促したり、避難所閉鎖後は昼休みに仮設住宅の住民を招待したり、いろいろな人との交流を通じ、活動意欲を高めている。

「共に夢や希望を叶えていこうとする強く明るい心」をもった子どもたちを育てていくことを目標とし、保護者と地域と学校の連携の重要性を認識し、一人ひとりの子どもたちのために、力をあわせ一歩一歩、取り組みが進められている。

謝辞：元山田南小学校長先生、元山田南小学校副校長先生、元山田南小学校 PTA 会長　佐藤様、山田南小学校 PTA 会長　小原様、貴重な体験をお聞かせいただくとともに本資料の制作にご協力いただきありがとうございました。

製作協力：(株)建設環境研究所　**参考文献**：東日本大震災津波記録誌(岩手県教育委員会)、「あの日から明日に向かって」東日本大震災 山田の記録(山田伝津館)